

2014年 和本で見る書物史

第5回 書物観の生成 寺院と書物

はしぐち こうのすけ
橋口 侯之介

平家の時代から戦国時代の末までを中世という

平安時代の末期、天皇の上に「院」が君臨する政治の形（院政）となった1100年代から、豊臣秀吉によってほぼ全国統一された16世紀末までを中世という。500年も続いたことになる。

この長い中世の間に培われた技術・意識の積み重ねは重要で、現代人の書物観にも影響を残している。

写本とは

印刷された本（**版本**）に対して、手書きの本を**写本**という。古代の歌集・物語・記録などが今でも残されているが、すべて写本である。印刷されたのは、ごくわずかの仏教関係書だった。中世の書物史は、その写本の重要性にあるといってもよい。それは**手書きの本といえどもメディアである**、ということである。書物が千年続く意味は、連綿と「書き継ぐ」という仕事を通してなされてきた。

源氏物語が今も読み継がれるのは？ 藤原定家の仕事

写本がメディアの力を持っていたといっても、すべてが残されたわけではない。平安時代には、もっと多くの物語があっただろう。しかし、大半の物語は今と同じように短い間に消えてしまったはずである。また、正しく写しているとは限らない。とくに物語の場合、写す者が意図的に改変してしまうことも多々あった。

そこで重要なのは、すぐれた文学観にもとづいた取捨選択と、正確なテキストの保存である。鎌倉時代のはじめの公家・藤原定家（ていか、1162-1241）がそれを行った。各種の物語・和歌集の注釈と正確な伝本の整理をして善本（証本という）を残そうとしたのである。

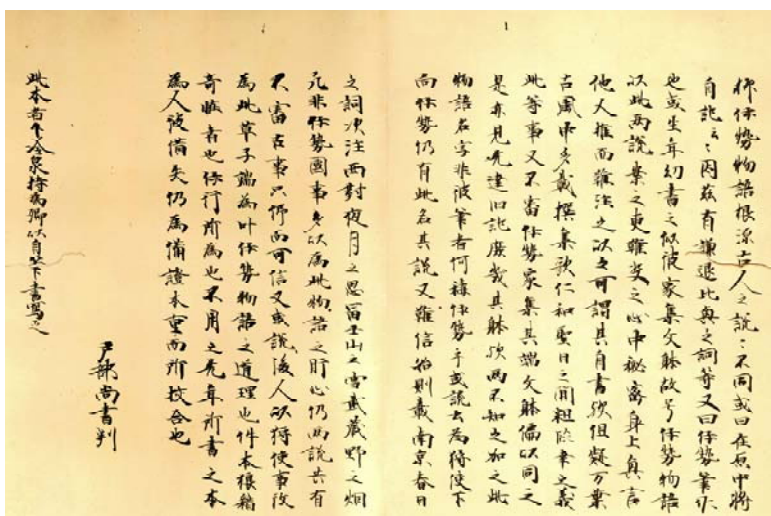
定家は藤原俊成の子として生まれた。代々和歌を専門とした家柄で、歌人としても第一級であり、『新古今和歌集』などの撰者である。官吏として中納言まで登りつめた後、隠居して書物の仕事に没頭した。

『伊勢物語』や『土佐日記』も定家が書写したものの写しが、残されている。とくに『土佐日記』は紀貫之の自筆本の書誌情報が記述されている。以後、定家の子孫（＝現代でも冷泉家）が何代にもわたって書写することを仕事にしてきた。古典文学の本が残るとするのは、そういう地道な仕事の積み重ねである。

この後世の写しであっても、定家の時代の面影を残すような筆遣いで、装訂も列帖装にした（上図）。

この時、定家が書き残した『源氏物語』は、それまでのいくつかの写本にあった不正確さなどを取り除き、原作に近づける最大限の努力をした。青い表紙だったので、「青表紙本」と呼ばれ、後世、定本としてきた（現代でも多くの本が採用している）。

ただし、正しい写本＝作者の草稿とはいえないところがある。青表紙



藤原定家が校訂した『伊勢物語』の写し。代々冷泉家が原型のまま写してきた。これは江戸時代のもだが、定家の時代の面影を残す



西川祐信が挿絵を描いた『源氏物語』宝暦六年刊。『伊勢物語』右側に書かれているのは一種のあとがき。戸部尚書とは藤原定家のことである。

本には、定家の「こうあるべきだ」という主観が入っているともいわれる。

同じ頃、清和源氏出身の源光行・親行の親子が、同じように『源氏物語』の最善なテキストづくりをしていた。この二人が河内守の役職だったことから、これを「河内本」という。最近はこちらのほうが原文に近いという指摘がされている。

その後の平安物語

仮名交じり文の物語は、平安時代には草子とされて格の低い扱いだだった。そのため卷子本にする必要がなく、冊子本の新しい形態となったのだった。やがて、定家や源光行らの努力もあって、主な物語類の正確をきしたテキストが手本として広がると、平安貴族の優雅な趣味への憧れとあいまって、「古典文学」として高い評価を得るようになる。以後、500年の中世の間、平安の物語はつねに読書と研究の対象となった。『源氏物語』や『伊勢物語』誕生から600年経った江戸時代に入っても、それは続く。むしろ、上級の子女(公家はもちろん、上級の武士や富を得た大商人など)のために、たくさんの版本(印刷本)がつくられた。そのときの基準となるテキストとして定家本が採用された。おびただしい数の本が江戸時代中つくられた結果、明治以降になってからの文学研究につながった。

寺院の役割

物語や歌集の伝存には公家の力が大きいですが、実は書物全体を見ると、もっと強大な寺家の存在があった。中世は、鎌倉政権や室町政権という武家の力が強い社会とみなされてきたが、現実の権力を仔細に見ていくと、そうでないことに気づく。武家はあくまでも軍事面と、地方における土地の支配に力をもっていただけで、すべての権力を握っていたわけでない。公家の力が落ちてきた中で、寺社(寺院や神社)は、経済や文化(書物を含めて)を中心に相当に大きな力を持っていた。

京都・奈良など畿内には、強大な寺院や神社がいくつもあり、荘園の権利を握り、商人や職人を支配し、さらに僧兵という軍事力までもっていた。また、寺社は「神仏習合」によって結びついていた。内部はピラミッド型の権力構造があり、その頂点に親王や公卿出身の学侶と呼ばれるエリートいた。その下に武家出身の一般僧がいて、ここまです僧侶といった。この出身身分の上位が寺院内部でも力を持っていた。その下に大衆と呼ばれる層が寺院中心に形成された都市周辺に集まって住んでいた。

書物の世界からみると、それまで政権の中心にいた公卿は没落してゆき、無骨な武士は文化にあまり貢献していないので、中世の有識者、学者というのはほとんどが僧侶だったことになる。恋の物語である『源氏物語』ですら僧侶による注釈書があった。

寺院は、書かれたもの(書物や文書)を必ず保管する。そのために宝蔵や文庫(ふみぐら)をつくり、もし火災などがあつたら、まっさきに避難させた。実際に物持ちが良く、現代まで伝わるものが多い。また中世は説話を好む傾向が顕著で、多くの説話集が編まれたが、これも寺院という場があつたからだ。『徒然草』の吉田兼好(卜部氏)、『方丈記』の鴨長明も社家の出身。

点・句読点

漢文も平安の物語も本来は、句読点すらない。段落もないことが多い。早くから経典に区切りや息継ぎがわかるように点を入れる(加點、科點)のをはじめ、しだいに漢文を読むための訓点や振りガナをつけはじめる。このように点などを原文に書き加えることを「書入」という。近代以降の「買い込み」とは区別する。

句点と読点を区別しないなど、現代とは異なった方法で、決まりがあるようでないのだが、江戸時代の版本は書入でなく初めから印刷で入るようになる。

漢文と訓読

日本人にとって外国語である「漢文」を読むためのさまざまな工夫がこらされてきた。主語・述語の順、文字の品詞などを記号であらわす方法である。

文字に助詞・助動詞を加えることで、意味がわかるようにするのが、ヲコト点である(右図)。その方法は寺院や家ごとに秘伝とされ、標準的ではなかった。現在の一、二点レ点など返り点とカタカナを用いる方法は室町時代の後半から。そこでようやく標準化された。

文字の読み方（漢音読み、呉音読み、訓読み）で振り仮名をつけるのも一連の訓読のための工夫である。

このような原漢文に朱などをつかって点を入れるのも書入である。これで、事実上の「翻訳」ができた。

書入が書物を「育てる」

エリート僧侶の知識人は、本業の仏教の研究に励む一方、中国の文献を学び、古典文学や歴史などの勉強もした。本は彼らによって、保存され、書き写されて伝わった。

それだけでなく、内容について注釈を加え、読みやすくした。平安時代の仮名遣いや用語が、次の時代にはすでにわからなくなっていることが多かった。

それを解説することも注釈の役割だった。

次の読者は、この注釈ごとまるまる書き写す。それで学問が継承された。そのために原文に増して本が厚くなってしまふので、抜き書きの本もできる。公家の日記の中から一定の行事の作法だけを抜いた「部類」などはその例。

注釈は研究だけでなく、書物を残し、「育てる」役割をはたしたのだ。

古典研究というのは、こうした長期にわたる積み重ねである。

江戸時代も継続され、北村季吟の『源氏物語』注釈書である『湖月抄』では、歴代の主要な注釈を引用しつつ、自分の意見を加えている。語彙や文意などの解釈は、上段のあきに書き入れる。

注釈とは

漢代から 儒学の経典の注(註とも)をつける＝字句の解釈、訓詁学という方法が発達していた。唐代になると、この注にさらに注をつける疏(シヨともいう)が登場する。清朝まで中国の学問は、この考証学＝訓詁と校勘が主であった。

→左:後漢・鄭玄の註。『儀礼鄭注』。さらに江戸時代の漢学者・皆川淇園と思われる詳細な書入がある。

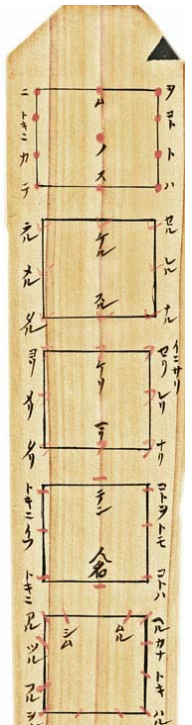
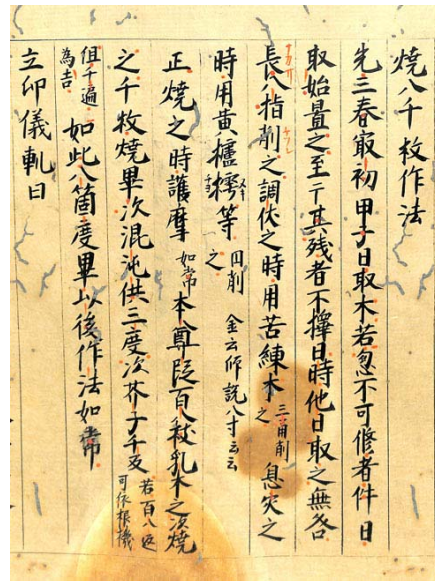
右:『論語注疏』三国時代の魏の何晏(かあん)の註(集解=しっかい)にさらに宋代の学者が註をつけた。

日本でも早く『日本書紀』の校読が行われ、その注記した『日本紀私記』が平安時代の初めにできた。それ以来、中世までの学問といえば、注釈をすることだった。このような注釈本を「抄」といった。抄は抜き書き、手書きのことだが室町期にはカタカナ交じりの注釈本をカナ抄と呼ぶようになった。当時の講義口調がわかる資料にもなる。

中世は、書き入れで対応してきたが、江戸時代に入ると、注釈ごと印刷する。

まだある書入のルール

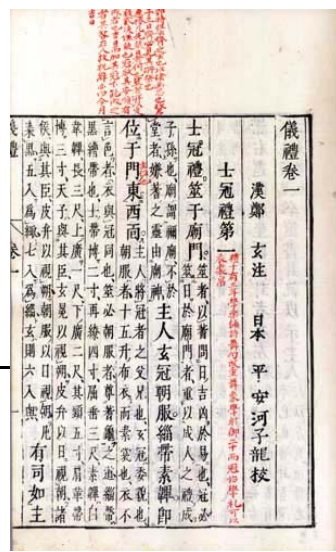
注釈、校訂は中国や欧米の書物にもあるが、和本にはさらに複雑な書き入れの世界をもっていた。和本は頭の部分を少々広くとってあって、そこに書き入れるので



ヨコト点の図を入れた構。これを手元に置いて点を入れてたのだらう(明治大正頃の複製か?)。左は室町時代と思われるヨコトの入った経典。



『湖月抄』。上段が頭注の形で詳しく解説がある。さらに本文中にも語彙の注釈がある。いずれも中世以来のさまざまな本から抜き書きしているものだ



ある。本文を囲む罫線を「^{きょうかく}郭」といい、その上の欄外を首とか頭と書いてかしらという。ここに注釈などを入れるのを頭書といい、別名^{ごうとう}龍頭ともいう。龍というのは中国伝説上の大亀のことである。神仙の住む山を背中に乗せて大海を漂うという故事からきている。その龍の上に乗った鬼を魁といい、科挙に一番で合格した者(状元)のシンボル。『遊仙窟抄』は角書に「龍頭図画」とあり、この頭書にカナの注釈を入れ、さらに数丁ごとに挿絵が入る(下図)。

校合

そのひとつが、まず^{きょうごう}校合である。文字の誤りを直すだけでなく、別の本ではここがこう書かれているという文字の校訂を入れるのである。一、二字のときは朱を使って、その文字の横に書き加える。誤字脱字も同様に訂正記入される。これは、いまの校正記号と同じようなものである。むしろ現在の校正の流儀は和本時代からの伝統である。

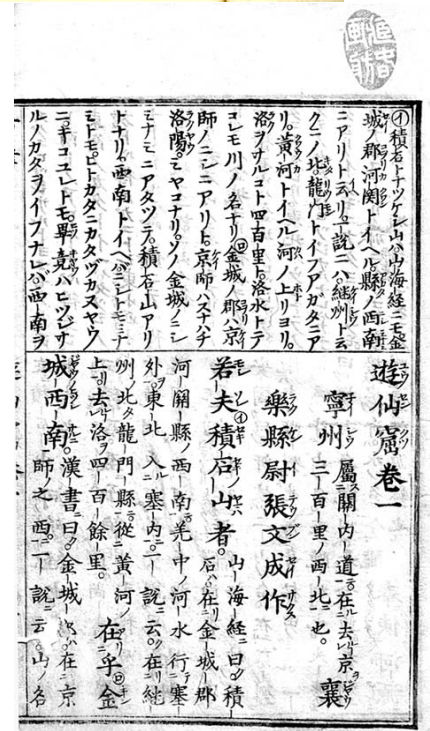
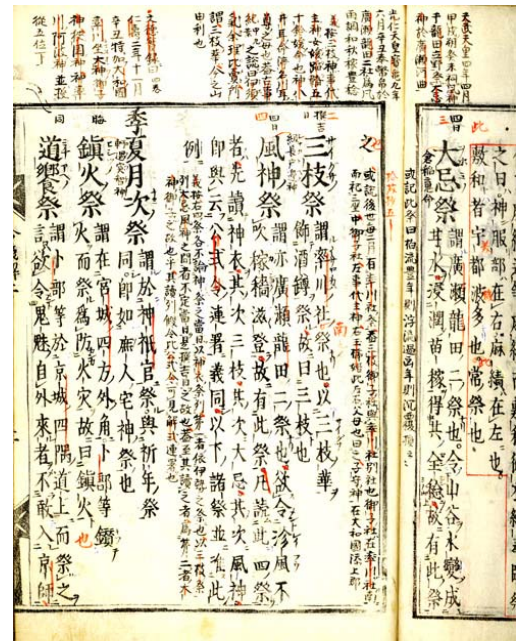
朱引

書き入れにはルールがあって、やみくもに書いているわけではない。訓点が標準化された室町時代、漢文の固有名を区別するための書き入れ方法(朱引^{しゅびき})も標準化された。それが歌になっていて、「本邦書籍朱引法歌 右所、中者人乃名、左官、中二者書乃名、左二者年号」といい、文字の右側に朱線を引くときは、それが所(地名)であることを示し、文字の中央に乗せて線を入れるのは人の名、左側にあれば官職名を、中央の二重線は書名を、左側の二重線は年号をあらわす。

これは版本に印刷されることはない。必ず朱の手書きで書き入れる。

誰が書いたか分からないことが多いのだが、書き入れが多いほど実力のある人が記入した可能性がある。

右は『遊仙窟』に頭注を入れた『龍頭図画遊仙窟抄』。左は魁星を描いた図(明版の和刻本)。枴(斗=ます)を蹴っている鬼が大亀の上で走っている。星、珊瑚、火炎などさまざまなシンボルが描かれる。龍が鰲になっている図も多い。音は同じだが、鰲は魚の化身。



朱引が入り、さらに頭書にびっしりの注釈の書き入れ本。古代の律令を解説した『令義解』(りょうぎげ)。

参考文献

- 冷泉為人『冷泉家・蔵番ものがたり』2009、NHKブックス
- 三谷邦明・小峯和明編『中世の知と学—注釈を読む』1997、森話社
- 小川剛生『中世の書物と学問』2010、山川出版社、日本史リブレット78
- 五味文彦『書物の中世史』2003、みすず書房
- 中田祝夫『古点本の国語学的研究』改訂版、1979、勉誠社